

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：13903

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370066

研究課題名(和文)女性の宗教的主体構築 ジェンダーの視点から

研究課題名(英文)The Politics of Religion Gender from a Feminist Anthropological Perspective

研究代表者

川橋 範子(KAWAHASHI, Noriko)

名古屋工業大学・工学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：10303687

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、宗教研究にジェンダーの視座を導入することにより、女性の宗教的主体の構築のあり方を考察することにより、最終年度には論文集『宗教とジェンダーのポリティクス-フェミニスト人類学のまなざし』を出版した。

この本はジェンダーの視点からの宗教における女性の主体に関する研究の総括となるもので、宗教学にとどまらず、人類学の領域で宗教とジェンダーを研究する若手研究者たちとも連携し、フィールドワーク調査および理論的研究の多面的なアプローチを用いたものとなっている。これにより、グローバルな規模で進行しつつあるジェンダー宗教学の重要性と日本における個別事例の解釈を、国内のみならず海外に向けても発信できる。

研究成果の概要(英文)：The researchers' aim is to approach their subjects critically from a gender perspective and perform an examination or analysis in light of their criticism or their reframing of interpretations that have been accepted as standard. The image of women as actors in religious history has been romanticized. In other words, attention has focused mainly on women of exceptionally heroic quality, and the images of those women have been amplified, in an attempt to overturn the image of women as sacrificial victims of oppression. An approach that seeks to substantiate the agency of women in this way, however, can only be futile. This research has illuminated the existence of women in many traditions who had never before been recognized on the public stage of history, and it has shown how, despite the constraints imposed by their times, women have independently and actively engaged in religious activity.

研究分野：人文学

キーワード：宗教学全般 宗教 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

本研究の構想は、欧米の思想の輸入ではなく、日本の宗教研究にジェンダーの視点を組み入れ、そして日本のジェンダー研究に宗教の視点を組み込むことから生まれた。2007年に『ジェンダーで学ぶ宗教学』(田中雅一・川橋範子共編 世界思想社)を出版し、日本で初めてのジェンダーの視点を中心にした宗教学のテキストを出すことができた。本研究はその続編ともいえるべきもので、これまで続けてきたジェンダーの視点からの宗教における女性の主体に関する研究の総括としての論文集の出版を目指したものである。

2. 研究の目的

本研究は宗教研究にジェンダーの視点を組み入れるにあたって、フェミニト人類学者と連携し新しい領域に挑戦しようと試みた。自文化、あるいは異文化の女性たちの宗教実践を描き出すために、日本の宗教研究には手薄に見える、自らの立ち位置への自己再帰性や、インフォーマントとの関係性の中に生まれる権力関係を探求し、そこにジェンダーの視点を不可欠なものとして組み込んだ。

3. 研究の方法

本研究の遂行に当たっては、宗教学と人類学を専門とする研究者7名で、毎年2回研究会を開いて情報交換や議論を重ねつつ、また宗教研究を巡る諸学会においてジェンダーにかかわるパネルを開いてきた。また、国際会議にも登壇し、海外の研究者との交流も図った。

4. 研究成果

宗教は、女性にとって解放と縛りの両義的な意味をもち、一方では女性を排除し他方では取り込もうとするといわれる。女性は民族や国家の独自性や精神的本質を貯蔵する象徴であるかのようにみなされ、ヴェールやサティなどの慣習の是非をめぐる議論は複雑化している。さらに、近年問題を複雑化するのは、欧米の宗教研究者による日本の宗教と女性に関する言説の動向である。たとえば、現代日本における仏教尼僧の自己認識に関して、女性僧侶はその地位や儀礼の場での役割において男性僧侶よりも劣位に置かれているが、宗教者として女性特有の役割を担っているという解釈が、欧米の日本宗教研究でも、一定の評価を得ている。しかしある程度まで家父長制を内面化したうえで演じるジェンダーの役割概念が女性にとっての自己肯定の手段でもあり、性役割を演じることによって獲得するメリットがあるという解釈は、更なる具体的な事例の抽出が必要なのではない。いわば限定つきの戦略によって、女性たちに従来許されていなかった異議申し立てが、どの程度まで可能になったのか。そして、女性たちの自己理解や自己実現の認識が、男性たちの側にどのような影響力や変

革の意識を与えうるのか、それこそが明らかにされていなくてはならないであろう。

さらに、このように非西洋の女性の主体をいわばパトロンのように庇護する立場は、結果として家父長制的な宗教構造の現状維持の加担につながる危険がある。特に、海外の研究者が家父長制的な教団を擁護するような研究を発表することは、教団の性差別的な体制の現状維持につながる有害な燃料を与えてしまうということもある。言い換えると、新宗教は底辺の女性に救いをもたらした、あるいは、仏教に性差別はないなどの、男性中心主義的な視点に基づいた従来言説と同様に、家父長制的な宗教が女性にもたらす抑圧や搾取を不可視にし、女性たちの抵抗を周辺化してしまうのではないかと。女性たちを「宗教にすぎない家父長制の哀れな犠牲者」と描きだす見方を排除しつつも、彼女たちの主体をロマン化することなく、女性を抑圧するさまざまな権力や差別のヒエラルキーの批判的分析が重視されなくてはならない。つまり、女性たちを無力な犠牲者と固定化せず、女性たちがいかに自身の困難な状況を変えようと周囲に働きかけているのかを見る重要性は言うまでもないが、彼女たちの選択や行為を過度に称揚するのではなく、この抵抗し闘争する女性たちが大きな力関係や権力構造に追い込まれていく可能性も丹念に見ていかなくてはならないということである。本研究では、以上の論点を明らかにしてきたと考える。

歴史学、民俗学、宗教学において、女性を主題にした研究や、研究者が女性である研究すべてが「ジェンダー研究」とであると信じて疑わない傾向も少なくない。「ジェンダー」という言葉は「女性」の同義語ではないにもかかわらず、「女性の視点」と「ジェンダーの視点」が無批判に同一視されている現状がある。本研究が明らかにしたように、実際には、女性宗教者が活動する現場には、性差別や男性中心主義から生ずるさまざまな葛藤や困難があり、それらの問題が「個人の問題」として処理され、不可視化されている。これらの研究会を通じて、1980年代以降、さかんに研究されてきた「日本の女性と宗教」の解釈をめぐって、理想化された女性宗教者像に対峙する批判的な視座から再検討を試みた。そして、従前の研究では十分に把握されてこなかった、日本の女性の宗教実践をめぐる多様な問題群を明らかにした。その中で、ラディカルなジェンダー平等を求める実践のみに特化せず、女性たちの日常の挑戦や交渉の先に見える変革や変容の可能性を多角的な視点からさぐることを目指したが、その試みは国内外の学会においても一定の評価を得ることができた。

具体的な研究会の実施日と内容、および学会でのパネル開催における本書執筆者の発表タイトルは以下のとおりである。

<研究会>

・平成 25 年 7 月 14 日(日)
平成 25 年 9 月の日本宗教学会でのパネル発表「フェミニスト人類学がまなざす女性の宗教的实践」および「生殖をめぐる問題と宗教」に向けて、意見交換及び事前打ち合わせのための合同研究会

・平成 26 年 1 月 5 日(日曜日)
信仰とジェンダーのポリティクス出版の企画書検討

・平成 26 年 7 月 6 日(日)
「女性の宗教的主体」研究会 第 2 回

- 英文文献の感想・講評
- 論文の講読・意見交換
- 信仰とジェンダーのポリティクス・出版に向けての打ちあわせ

・平成 26 年 12 月 21 日(日)

- 主体化と vulnerability - ジュディス・パトラーの概念の紹介 松尾瑞穂
- 霊山と女性 - ジェンダー宗教学からの再検討 小林奈央子

・平成 27 年 10 月 11 日(日)

- IAHR、特に宗教とジェンダーを取り巻く日本の研究状況の課題や、問題点について 川橋範子
- イスラームとジェンダー表象をめぐるグローバルな問題系 / およびエジプト 嶺崎寛子
- フェミニスト理論の行き詰まりとその打開策: ナンシーフレイザーの紹介 飯國有佳子

・平成 27 年 12 月 23 日(水) 13:00 ~ 16:30

- まとめ 川橋範子
- 現代日本でスピリチュアリティを考えること 小松加代子
- 仏教儀礼を支える、変える: 中国シーズンパンナのタイ族女性と上座仏教 磯部美里

<学会発表>

・2013 年 9 月日本宗教学会第 7 2 回学術大会
パネル「フェミニスト人類学がまなざす女性の宗教的实践」
発表者:

- 川橋範子: イントロダクション: 解釈の枠組み
- 嶺崎寛子: エジプト女性の宗教実践にみる「自己承認」
- 松尾瑞穂: インドにおける断食と自己犠牲のポリティクス
- 飯國有佳子: 「出家」を問い直す: ミャンマー女性の宗教実践の事例から

コメンテータ: 三木英司
会: 小松加代子
パネル「生殖をめぐる問題と宗教 - 日中韓の事例から - 」

発表者:

- 磯部美里: 中国・西双版納タイ族からみる出産儀礼とジェンダー
- 小林奈央子: 「女性と『聖域』をめぐる言説の変容に関する一考察」

・2015 年、第 21 回国際宗教学宗教学史会議 (IAHR) ドイツ、エアフルト
パネル「Changing Women's Roles in Contemporary Japanese Religions 現代日本宗教における女性たちの役割変化」

- 川橋範子 コメンテータ
- 小林奈央子 「女性が『霊山』へ入るとのこと: 大峯奥駈修業を事例に」

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

KAWAHASHI, Noriko, "A Voice from Troubled Japan." *Journal of Feminist Studies in Religion*, 2014, 30(2).

KAWAHASHI, Noriko "When It Comes to Gender Equality, Religion in Japan Lags Behind." *Sightings*, 2016, Jan. 7.

KAWAHASHI, Noriko "Shinto." Nancy A. Naples, ed., *The Wiley Blackwell Encyclopedia of Gender and Sexuality Studies Vol. V*. Malden, MA: Wiley Blackwell, 2016.

KAWAHASHI, Noriko "Book Review: Barbara Ambros, *Women in Japanese Religions*." *Reading Religions*, April 2016.

KAWAHASHI, Noriko "Embodied Divinity and the Gift: The Case of Okinawan Kaminchu." Morny Joy, ed., *Women, Religion, and the Gift*. Zurich: Springer, 2017.

KAWAHASHI, Noriko, "Women Challenging the "Celibate" Buddhist Order Recent Cases of Progress and Regress in the Sōtō School" *Japanese Journal of Religious Studies* 44/1: 55-74, 2017.

KAWAHASHI, Noriko and Kobayashi Naoko, "Editors' Introduction Gendering Religious Practices in Japan: Multiple Voices, Multiple Strategies", *Japanese Journal of Religious Studies* 44/1, 2017.

小松加代子, 日常生活の中のスピリチュアリティ, 多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要, vol.7, 2015, pp.51-61.

KAYOKO, Komatsu, "Spirituality and Women in Japan", *Japanese Journal of*

Religious Studies 44/1:123-138, 2017.

〔学会発表〕(計 2 件)
上記に記述。

〔図書〕(計 1 件)

川橋範子「序章 宗教研究とジェンダー研究の交差点」、「第1章 フェミニスト人類学がまなあす女性と宗教」、川橋範子、小松加代子編著、『宗教とジェンダーのポリティクス - フェミニスト人類学のまなざし』、昭和堂、2016年。

小松加代子「第7章 日常の中の宗教性 - 日本におけるスピリチュアリティと女性」、川橋範子、小松加代子編著、『宗教とジェンダーのポリティクス - フェミニスト人類学のまなざし』、昭和堂、2016年。

6. 研究組織

(1)研究代表者 川橋範子

(KAWAHASHI, Noriko)

名古屋工業大学工学研究科 教授

研究者番号：10303687

(2)研究分担者 小松加代子

(KOMATSU, Kayoko)

多摩大学グローバルスタディーズ学部 教授

研究者番号：90211911